

渋沢栄一「渋沢栄一書簡」

明治28（1895）年2月1

3日

肃啓 ますます 益 御清穆 被為涉 わたらせられ

べんがたてまつり 奉抔賀 候。 小生義昨年来

病氣にて籠居、本年に相成 あいなり

候ても充分快方無之為、先頃 これなきため

興津へ転地療養 罷在 候。 まかりあり

昨今は軽快に付近々帰京

可仕と存候。 儲一事拝願 仕 候義は ぞんじ さて つかまつり

近来西洋紙の需用殊に

新聞用の紙 頻 に入用相 しきり あい

増候に付、木材原質を以低 まし もつて

下の印刷用紙揃出候義

益 必要に相成候に付、王子 ますます あいなり

製紙会社に於て更に一

工場増設の企図有之候処 これあり ところ

其地方は木曾もしくは

紀州大和辺の山林に適

当の場処ばしよこれあり有之候歟かと存候に付

閣下の御声掛を以て

山林局より右調査の義御

許可被成下度候。なしくだされたく尚委細の事はなお

製紙会社専務取締役

谷敬三参上拝願 つかまつるべく可仕候間

何卒御逢の上御聞取被下度候。なにとぞ くだされたく

此段一書拝顔仕候。 そうそう 匆々敬具

二月十三日

渋沢栄一

榎本大臣閣下

侍史